

原作小説と映画脚本からみる『GO』

二一世紀劈頭を飾る二〇〇一年、日本映画は宮崎駿監督の長編アニメーション映画『千と千尋の神隠し』の大ヒットからはじまったと言っている。いろいろ。

この作品は、これまでの外国映画を含めた日本でのすべての興行記録を塗り替えた上に、世界の三大国際映画祭と称されているベルリン国際映画祭でアニメーション映画として史上はじめて最優秀作品賞である(金熊賞)を受賞(二〇〇二)し、世界に日本のアニメーションの質の高さを証明したミニユメントな作品ともなった。

この『千と千尋の神隠し』が興行収入の日本映画界の新記録を樹立したことによって、〇一年の日本映画全体の興行収入成績は七八億四四〇〇万円となり、前年比で四〇%以上の増収となっている。このうち、大ヒット作品としての目安は興行収入二〇億円となるが〇一年のこれに相当する作品は九本を数える。これを端数を省いた興行収入の成績順では、『千と千尋の神隠し』(三〇〇億円)、『ポケッタモンスター セレビィ 時を超えた遭遇』(三九億円)、『パトル・ロワイヤル』(三一億円)、『二〇〇一年東映アニメフェア』(三二億円)、『陰陽師』(三〇億円)、『ドラえもん のび太と翼の勇者たち』(三〇億円)、『名探偵コナン 天国への

カウントダウン』(二九億円)、『冷静と情熱の間』(二七億円)、『ポタル』(二三億円)であり、『千と千尋の神隠し』がいかにずば抜けた支持を観客から集めたか分かる。また、この九本の作品中五本がアニメーション作品であり、日本映画が興行成績において、ジャンルとしてアニメーションに頼っているかを如実に示す数字となっている。

この二〇〇一年度における、日本映画の作品数は三九六本である。

この製作側の内訳数と、原作のある作品、そして劇映画以外のジャンルであるアニメーション、ドキュメントを表にして見ると表1のようになる。

これが二〇〇一年の日本映画の〈量〉である。

作品数三九六本の内、原作のある作品が一一二本であり、総本数の二八、三%が原作に依存した作品となっている。このうちアニメーションは六四本であり、先述した興行収入の二〇億円以上の成績を上げた九本の内の五本を占めたアニメーションの『千と千尋の神隠し』、『ポケッタモンスター セレビィ 時を超えた遭遇』、『ドラえもん のび太と翼の勇者たち』、『名探偵コナン 天国へのカウントダウン』の四本が東宝であり、さらにこの九本に次ぐ興行収入

を上げた『クレヨンしんちゃん、嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲』が一四億円であり、アニメーション作品だけで四二六億円の収入を上げており、東映の『二〇〇一年東映アニメフェア』の三一億円を合わせると四六七億円となり、日本映画の年間興行収入の七八一億四四〇〇万円の六〇%弱の割合を占める凄まじい成績を残しており、日本映画の興行収入の屋台骨を支えている事がこの数字からよく分かる。

表1

松竹	7	(原)3	(ア)1	(下)0
東宝	24	19	10	0
東映	26	18	11	0
口活	6	3	0	1
大映	2	1	0	0
日本ヘラルド	3	0	1	0
アスミック・エース・エンタテイメント	1	1	0	0
東映ビデオ	3	1	0	0
アルゴ・ピクチャーズ	3	2	0	0
ユーロ・スペース	2	1	0	1
ギャガ・コミュニケーションズ	5	3	0	0
ケイエスエス	6	5	0	0
その他	285	50	41	25
地方のみ/地方先行	23	5	0	0

(アニメーション作品の原作も、原作のある作品の数にカウントしている)

また、二〇〇一年の日本映画の〈質〉としては、映画専門雑誌の『キネマ旬報』の〈二〇〇一年映画ベストテン〉の選出作品を例として上げると次のような作品が選出されている。

表2

①『GO』	(監督) 行定勲	(原作) 金城一紀
②『ハッシュ！』	(監督) 橋口亮輔	(原作) 橋口亮輔
③『千と千尋の神隠し』	(監督) 宮崎駿	(原作) 宮崎駿
④『EUREKA(ユリイカ)』	(監督) 青山真治	(原作) 鳴海章
⑤『風花』	(監督) 相米慎二	(原作) 鳴海章
⑥『まぶたち』	(監督) 古坂智之	
⑦『リリイ・シユシュのすべて』	(監督) 岩井俊二	
⑧『ウオーターボーイズ』	(監督) 矢口史靖	
⑨『光の雨』	(監督) 高橋伴明	(原作) 立松和平
⑩『赤い橋の下のぬるい水』	(監督) 今村昌平	(原作) 辺見庸

となっており、日本映画の二〇〇一年度の優秀作品ベスト一〇の内、原作に依存した作品が六〇%の割合を占めている。

その内、①⑤⑨⑩位の作品が〈小説〉であり、②③位の作品が映画化に際して〈脚本〉執筆と平行して著作権を有した作品となっている。

二次大戦後の一九四六年より『キネマ旬報』誌は毎年日本映画ベストテンを選出しているが、二〇〇〇年までの

五四年間で年間のベスト一に選出された作品の中で小説を原作とした映画は二四本に上る。これはベスト一全体の六八、六%となり比率的には、かなり高い数字であると考えてよい。次頁の表3が一九四六年より二〇〇〇年まで『キネマ旬報』誌による優秀映画選出内の原作物の数であり、最優秀作品での原作物は原作者の名前を記している。(表3参照)。

そして二十一世紀初めの記念すべき年においては、金城一紀氏の在日韓国人少年の〈僕〉を主人公にした長編小説『GO』を宮藤官九郎氏の脚本、行定勲氏の監督という二一世紀を飾るにふさわしいフレッシュなトリオで、〈小説〉を原作とした二五本目にあたる『キネマ旬報』誌でのベスト一の作品が誕生した。

それでは次に、この金城一紀氏の小説『GO』を宮藤官九郎氏がどのように脚本化したかについて若干の分析を試みたいと思う。

金城一紀氏の『GO』は全体を七章に分けて構成されている。

各章別のサブ・タイトルは無く、一〜七と数字がうつついでるだけであり、各章毎の展開の事柄が読めない素つなない形式を採っているが、それは〈僕〉という独立した精神を有する、個を通しての一人称での文章スタイルで物語を展開するための、金城氏の構成上の必要な手段と考えられる。

そういう意図で紡がれたこの小説は「ハワイか…」オ

ヤジが初めてぼくの前で『ハワイ』という言葉を口にしたのは、僕が十四歳のお正月のことで、その時、テレビの画面では、美人女優三人がハワイへ行き、ただひたすら「きれい！おいしい！きもちいい！」を連呼するお正月番組が映し出されていた。ちなみに、それまで、我が家ではハワイは『墮落した資本主義の象徴』と呼ばれていた。当時、オヤジは五十四歳で、朝鮮籍を持つ、いわゆる〈在日朝鮮人〉で、マルクスを信奉する共産主義者だった。』ではじまる一章で〈僕〉の置かれた環境、家族紹介、〈僕〉の自己紹介を簡潔な文体で紹介していく、同時に金城氏独特の諧謔に満ちた文体が要素所につきる事のない泉のように溢れ、この小説を極めて魅力的なものにしている。

たとえば家族紹介では「その年のお正月はものすごい寒波に襲われていて、五十を過ぎていたオヤジの身にはかなり応えたらしく『関節が…』と切なそうにつぶやきながら体をさすっていた。オヤジは温暖な気候を持つ韓国の済州島に生まれ、子供時代を過ごしていた。ちなみに済州島は『東洋のハワイ』を自称している。一方、日本で生まれ、日本で育ち、十九歳の時に御徒町のアメ横でオヤジにナンパされて、二十歳で僕を生んだオフク口は、オヤジが転びかかっているのを見逃さず、素早く後ろに回り込み、でたために背中を押した。「ベルリンの壁は崩れたし、ソ連はもうないのよ。この前テレビで言ってたけど、ソ連が崩壊したのは寒さが原因らしいわよ。寒さって、人の心を凍ら

表3

	優秀作品数	原作物数	選出順位中の原作物										最優秀作品(原作物)			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10				
1946(昭和21)	5	0														安城家の舞踏会 (監・吉村、原・吉村公三郎)
1947(昭和22)	10	3	○	○											○	
1948(昭和23)	10	5	○	○				○							○	
1949(昭和24)	10	4	○	○						○						晩春 (監・小津、原・広津和郎)
1950(昭和25)	10	7	○			○	○			○				○	○	
1951(昭和26)	10	4	○							○					○	
1952(昭和27)	10	3		○	○				○							
1953(昭和28)	10	6	○				○						○	○		
1954(昭和29)	10	7	○	○			○	○	○	○				○		にごりえ (監・今井、原・樋口一葉) 二十四の瞳 (監・木下、原・壺井 栄)
1955(昭和30)	10	7	○	○	○			○	○	○	○					浮雲 (監・成瀬、原・林芙美子)
1956(昭和31)	10	7	○				○			○	○					真昼の暗黒 (監・今井、原・正木ひろし)
1957(昭和32)	10	6	○	○						○	○	○				米 (監・今井、原・八木保太郎)
1958(昭和33)	10	8	○		○	○	○	○	○	○	○	○				桝山師考 (監・木下、原・深沢七郎)
1959(昭和34)	10	8			○	○	○	○	○	○	○	○				
1960(昭和35)	10	5	○	○			○	○								おどろと (監・市川、原・幸田 文)
1961(昭和36)	10	5					○			○	○	○				
1962(昭和37)	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				私は二才 (監・市川、原・松田道雄)
1963(昭和38)	10	7	○				○	○	○	○	○					
1964(昭和39)	10	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○					砂の女 (監・勅使河原、原・安部公房)
1965(昭和40)	10	8	○					○	○	○	○	○	○			赤ひげ (監・黒沢、原・山本周五郎)
1966(昭和41)	10	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				白い巨塔 (監・山本、原・山崎豊子)
1967(昭和42)	10	7	○		○			○	○	○	○	○				上意討 (監・小林、原・滝口康彦)
1968(昭和43)	10	5					○	○		○	○	○				
1969(昭和44)	10	6	○					○				○	○			心中天竺島 (監・篠田、原・近松門左衛門)
1970(昭和45)	10	7	○	○	○					○	○	○				家族 (監・山田、原・山田洋次)
1971(昭和46)	10	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
1972(昭和47)	10	5	○	○	○	○	○	○								忍ぶ川 (監・熊井、原・三浦哲郎)
1973(昭和48)	10	7	○	○				○	○							
1974(昭和49)	10	5	○	○	○	○				○						サンダカン八番娼館 (監・熊井、原・山崎剛子)
1975(昭和50)	10	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
1976(昭和51)	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				青春の殺人者 (監・長谷川、原・中上健次)
1977(昭和52)	10	5	○				○	○	○							幸福の黄色いハンカチ (監・山田、原・ピート・ハミル)
1978(昭和53)	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				サード (監・東、原・軒上 洸)
1979(昭和54)	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				復讐するは我にあり (監・今村、原・佐木隆三)
1980(昭和55)	10	3										○				
1981(昭和56)	10	7	○	○						○	○	○				泥の河 (監・小栗、原・宮本 輝)
1982(昭和57)	10	6	○			○	○					○	○			蒲田行進曲 (監・深作、原・つかこうへい)
1983(昭和58)	10	8	○	○	○	○	○			○	○	○				家族ゲーム (監・森田、原・本間洋平)
1984(昭和59)	10	7	○	○	○	○	○	○	○							
1985(昭和60)	10	5	○					○	○	○	○					それから (監・森田、原・夏目漱石)
1986(昭和61)	10	8	○			○	○	○	○	○	○	○				海と毒薬 (監・熊井、原・遠藤周作)
1987(昭和62)	10	5								○	○					
1988(昭和63)	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				となりのトトロ (監・宮崎、原・宮崎 駿)
計	415	270	28	29	27	27	27	30	27	25	29	20				
1989(昭和64平1)	10	6	○		○			○	○	○						黒い雨 (監・今村、原・井伏鱒二)
1990(平成2)	10	8	○	○	○			○	○	○	○	○				櫻の樹 (監・中原 俊、原・吉田秋夫)
1991(平成3)	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				息子 (監・山田洋次、原・権名 誠)
1992(平成4)	10	7	○					○	○	○	○	○				
1993(平成5)	10	6	○							○	○	○				月はどこに出ている (監・雀 洋一、原・梁石日)
1994(平成6)	10	7				○	○	○				○	○			
1994(平成7)	10	5	○					○	○	○						午後の遺言状 (監・新藤兼人、原・新藤兼人)
1994(平成8)	10	3								○	○					
1994(平成9)	10	5	○	○	○							○	○			うなぎ (監・今村、原・吉村 昭)
1994(平成10)	11	7											○			
1994(平成11)	10	4	○													あゝ春 (監・相米慎二、原・村上政彦)
1994(平成12)	10	4											○			
計	121	71	7	6	9	6	9	5	4	7	7	10				
1946~2000(計)	536	341	35	35	36	33	36	35	31	32	36	30				

せるのよ。主義も凍らせてしまうのよ……」哀切のこもった口調だった。そのまま続けていたら『ドナドナ』でも歌い出しそうな勢いだった。うつむき加減でオフクロの言葉を聴いていたオヤジが顔を上げ、テレビの画面に視線を戻した時、いつの間にか水着姿になっていた美人女優たちが、オヤジにとろけそうな笑顔を向けながら、「アロハ!!!」と呼びかけた。「アロハ……」断末魔のつぶやきだった。オヤジは深く、長いため息をつき、そして転んだ。」という、〈僕〉の視線でその場の情景が視覚的に読者に容易に想像できるような諧謔味のある文体で表現するのだ。

〈僕〉のほうは「僕は選択しようのない環境にに応じて、ただ生きてきただけだった。でも、わけの分からない環境だったので、当然のようにヒネクレ者の悪ガキに育った。ならない方がおかしいと思わないかい？」の生活のなか、オヤジとオフクロの話し合い？の末朝鮮籍から韓国籍に変わる出来事には承諾するが「僕はある日を境に〈在日朝鮮人〉から〈在日韓国人〉に変わった。でも、僕自身は何も変わってなかった。変わらなかつた。つまらなかつた。いまや僕の目の前には無数の選択肢があつた。そのことに気づいていた」僕にオヤジから、中二の春休みが終わろうとしたある日、海岸に連れていかれる。

そこで「広い世界を見るよ……。あとは自分で決める」と元プロボクサーで基本的に口より先に手が出るタイプのオヤジの言葉に「なんてクサイことをするのだろう、とは思

わなかつた。僕はヒネクレ者だったけれど、同時にロマンチストでもあつたのだ。「広い世界」と言われて、血が騒いでしまったのだつた」僕は日本の高校を受験することを決心する。そして「ここでまず断っておきたいのだけれど、これは僕の恋愛に関する物語だ」と巻頭で釘を差してきた物語がはじまっていくのである。

二章では、はじめに〈僕〉の日本の高校生活の描写から綴られていく。

と言つても、通常の学校生活の描写ではなく、差別・偏見にたいする自衛のための必須手段と〈僕〉が考えていた〈僕〉への挑戦者との一対一の対決である。

入学後「初めての「挑戦者」は加藤だった。加藤は、ある広域指定暴力団の幹部組員の父親を持つ、生粋の悪ガキだった。僕も初陣だけあつて気合いが入っていたから、灰皿を使って加藤の鼻を折つてやった。勝負は呆気なく決まったが、父親のバツクがあつたので、のちのち面倒臭いことになるのが心配だった。取り越し苦労だった。加藤は鼻の治療をきつかけに、それまで気に入ってなかつた鼻の形を、思い切つて整形手術で直すことに決めた」この事を契機に「加藤は、高校でできた初めての友人になつた。そして、いまのところ、僕が友人と呼べる唯一の存在だった」以来『二十三戦無敗の男』として校内に君臨している〈僕〉は鬱屈した気持ちを通り越した「まあ要するに、日本学校の不良たちにとってみれば、僕は『朝鮮人』と書かれた空

手道場の看板なのだ。道場破りよろしく、僕を制してそれを手にすれば、仲間がいい顔ができる。恐ろしく次元の低い話しかれど、僕は次元の低い高校に通っているから仕方がない。でも、僕はその次元の低さが嫌いじゃない。勝つか負けるか。分かりやすい。理屈じゃない」と割り切ろうとしている。

家庭では、オヤジが経営している四軒のパチンコの景品交換所が二軒に減る。〈撲〉にボクシングを教えてくれたオヤジはプロボクサー時代、全三六戦中一度もダウンを喫したことのないタフなボクサーで、ジムの会長に勝手につけられた『杉原秀吉』のリングネームとは別に〈鉄筋コンクリート〉のニックネームを持ったファイターであったが、引退後、家族を養うため景品交換所をしていた。そんなオヤジでも警察OBから二軒の店を奪われる事をジツと我慢するしかなかった。オフクロの方は、オヤジと喧嘩して今年三度目の家出をしている。「交換所を奪われたことと、ハワイに行ったことで、オフクロは強くなった。朝鮮(韓国)は昔から儒教の色濃いお国柄で、その伝統は〈在日〉社会にも受け継がれていた。儒教は、乱暴に言ってしまうと、「目上の人間を敬え」という思想だ。それが、家庭においては、「女子供は御主人様(父親)には決して逆らってはいけない」ということになる。

そんなわけで、ハワイに行くまで、うちではオヤジのおかずは僕とオフクロよりも二品多かった。ところが、

ハワイから戻ってからは四品が増えた。ある日の晩御飯のあと、オヤジが出っ張り始めた腹をさすりながら、オフクロに訊いた。「最近、どうしておかずが増えてんだ？」キッチンで洗い物をしていたオフクロは、にこやかに答えた。

「糖尿病になってくれないかな、って思ってた」オヤジがいきなりカウンターパンチを食らって度肝を抜かれているところへ、キッチンからテーブルへ戻ってきたオフクロは、よいしょ、なんて言って椅子に座り、テーブルの端に置いてあった女性週刊誌を、テーブルの上に立てるようにして広げた。オヤジと僕の目には、表紙に載っている大きな活字がよく見えた。『暴力夫の夕食に砒素を入れ続けた鬼妻!』女性週刊誌の背後にあるオフクロの顔には、ジャック・ニコルソンが浮かべるような笑みが貼りついていた。

こうして、儒教は敗北した。以来オフクロは、オヤジを愛しながらも精神的優位を得て喧嘩すると親友のところへ家出してオヤジの頭を冷やす作戦を敢行していた。

そのトバッチリをオヤジから食いそうになった〈僕〉は、加藤の誕生パーティーへと逃げ出す。そこで運命の女性と出会う事になるとは露知らずに。

加藤が出迎えてくれた貸し切りのクラブに「二人の女の子が店内に入ってきた。角度のせいで、僕には彼女の上半身しか見えなかった。彼女の髪は『勝手にしやがれ』のジーン・セバーグのように短かった。僕は『勝手にしやがれ』のジーン・セバーグが好きだった。瞳は遠目でもはっ

きり分かるくらいにつぶらで、『エイジ・オブ・イノセンス』のウイノナ・ライダーの瞳と同種の知性を湛えていた。僕は『エイジ・オブ・イノセンス』のウイノナ・ライダーが好きだった」（男が彼女に声を掛けた。彼女は男の意気をすべて奪い取り、クシヤクシヤに丸めて放り投げてしまふような冷たくて力強く鋭い視線を、男に向けた。男は言葉を失い、恥ずかしそうに肩をすくめたあと、彼女のそばを離れていった。明らかに彼女の回りにある特殊な磁場が発生し始めていて、まわりの連中の視線はその磁力に吸引寄せられていた。僕もその一人だった。僕はウーロン茶のグラスを置き、彼女に強い視線を注いだ）（ロフトには、かなりの数のテーブルがあった。彼女は、僕のふたつ前のテーブルあたりで、軽いため息をついた。目の光が少し少し落ちていたようだった。彼女は、せつかくだからといった感じで残りのテーブルに視線をやり始めた。そして、僕のテーブル。彼女の目の光が再び強くなった。強い視線が僕に注がれる。ついでに、彼女の視線を一緒に追っていたギャラリーの視線も。僕はたじろぎはしたものの、いつもの癖が顔を出し、視線を向けている彼女を睨みつけた。不良用語で言えば「ガンをつけた」

これが〈僕〉の運命の女性である桜井との出会いであった。ふたりはその後、夜の東京の街を散歩し、小学校の校庭へと入り込む。すべて桜井が主導しての奇妙な道行き、そ

して奇妙な会話の連続である。

〈僕〉日本での通称名・杉原は、この謎めいた雰囲気や発散する魅力的でかつ知性的な彼女に、生まれてはじめての恋をしてしまふ。

こうして「ここでまず断っておきたいのだけれど、これは僕の恋愛に関する物語だ」がはじまるのである。

三章では、〈僕〉の民族学校に通っていた頃の挿話を章の核として、秀才の親友正やタワケ先輩との交遊、家族の話などを通して、〈僕〉の帰属するものへの自意識の揺れが綴られていく。

例えば「僕が小学二年生だったある日、僕と友達数人が下校していると、後ろからミニパトが走ってきた。友達の何人かが車道のほうにはみ出して歩いているのを、婦人警官は見逃さず、ミニパトに搭載されているトランジスタ・メガホンを使って、こんな風に注意した。「あんたらみたいな社会のクズは道のはしを歩きなさいっ！」なんてひどいことを言うんだらう、と僕たちは思わなかった。僕たちの学校にはよく右翼の街宣車が来ていた。もっとひどいことを連呼したりしていたので、僕たちは慣れていたので。そう、慣れてはいたけれど、やっぱり腹は立つ。そんなわけで、翌日、僕と友人たちと『ミニパト襲撃チャリンコ部隊』を急遽結成して、ミニパトにゲリラ的襲撃を仕掛け始めた」それは水をいっばいに入れた風船をミニパトに投げつけて逃げる、という遊びだった。そんな偏見・差別意識

に對してのささやかな反抗ぶりを見せた時期の後の小学三年頃から〈僕〉は学校が嫌いになつていく。「学校にいると、常に厳しい統制下に置かれていような窮屈さがあった。そんなわけで、ぼくは小学四年に上がった頃から、よく「頭の左側が痛い」とか「目の奥が熱い」とか「ペロが割れそうに痛い」とか言つて学校を休むようになった」そして盛んに家でビデオ映画を見たり、オフクロと映画館に行くのを見て、「なんか他にやりたいことがないのか」とオヤジに訊かれ〈僕〉はボクシングを習いたいと言う。トレーニングをはじめた日にオヤジは言つた「左腕をまっすぐ前に伸ばしてみな」僕はとりあえず言われた通りにした。オヤジが続けた。「腕を伸ばしたまま、体を一回転させろ」「は?」「足をその場所から動かさないうで、どっち回りでもいいから回つて見る。コンパスみたいにな」おやじの顔は真剣だつた。僕はためらいながらも、左腕をまっすぐ伸ばしたまま、左回りに体を一回転させた。僕が再びオヤジとまっすぐ向き合つると、オヤジは言つた。「いま、おまえのごぶしが引いた円の大きさが、だいたいいまのおまえという人間の大きさだよ。その円の真ん中に居座つて、手に届く範囲のものにだけ手を出したり、ジツとしたりしていればおまえは傷つかないで安全に生きていける。言つてること分かるか?」僕はゆつくりと頷いた。オヤジは続けた。「おまえはそういうの、どう思う?」僕はすぐに答えた。「ジシクせえ」オヤジはニカツと笑みを浮かべ、言つた。「ボ

クシングは自分の円を自分のごぶしで突き破つて、円の外から何かを奪い取つてこようとする行為だよ。円の外には強い奴がたくさんいるぞ。奪い取るどころか、相手がおまえの円の中に入つてきて、大切なものを奪い取つていくことだってありえる。それに当たり前だけど、殴られりや痛いし、相手を殴るのだから痛い、何よりも、殴り合うのは怖いぞ。それでも、おまえはボクシングを習いたいのか? 円の中に収まつてるほうが楽でいいぞ」僕は少しもためらつたりせずに、答えた。「やる」オヤジはニカツと笑い、言つた。「それじゃあ、始めるか」ボクシングの教えを通して、オヤジは自分の身体を痛めて体得した人生訓を言つてるのだと言ふ事を〈僕〉は小学五年で理解する。

〔中学に上がつてから、僕は学校に真面目に通うようになった。とはいつても、相変わらず学校は嫌いだった。学校に通つていたのは、そこに友達がいからだつた。まわりにいる連中は、血を分けた兄弟みたいなものだつた。よほどのことがないかぎり、ほとんど変わらない顔ぶれのまま、最低でも高校まで一緒に一貫教育を受けるのだ。まるで長い合宿生活を送つていようなもので、僕たちのあいだには友情以上のものが芽生える。そして、芽生えたものを成長させるには、やっぱり「差別」という養分だつた〕そんな生活の中で、〈僕〉はタワケ先輩と仲良くなる(タワケ先輩はサッカー部のエース・ストライカーで、学校のヒーロー的存在だつた。僕はバスケ部だつたが、分活が終

わったあととは、ほとんど毎日タワケ先輩とつるんで街を練り歩いた。そして、喧嘩相手を見つけ、喧嘩をした。理由はいらなかった。目が合つて、相手がそらさなければ、それが始まりの合図だった。タワケ先輩と僕は、いつも苛立つていたのだ。原因は分かっていたいなかった。でも、その苛立ちが、部活では解消できないということだけは分かっていた。そんなタワケ先輩も卒業し、〈僕〉は中学三年に進級してすぐに、日本の高校を受験することを教師に宣言する。「僕は勉強を開始した。閑節がおかしくなつたといつて部活を止め、正義に目覚めたといつて放課後の悪さを止め、内緒で学習塾に通い、必死に勉強した。そんなある日、僕が学習塾に入つていくところを、ある友達に目撃された。その翌日には、目撃談は全校に広がつていった。そして、教師のイジメが始まつた」そのひどいイジメを一人だけ庇つてくれたのが、韓国籍で、韓国と日本のハーフで『開校以来の秀才』と称された正一だった。こうして『開校以来のバカ』の〈僕〉と『開校以来の秀才』の風変わりなふたりの友情が誕生した。〈僕〉が奇跡的に日本の高校に入学した後も、民族高校に進学した正一との付き合いはつづいた。よく正一とふたりでオフクロと親友でオヤジと喧嘩した時の家出先の焼肉屋のオーナーのナオミさんの店に行き、お互いに好きな本の話をした。正一は文学が好きで〈僕〉は科学系の本が好きであった。そんなふたりの友情をオフクロとナオミさんが暖かく見守つてくれる日々

がつづいた。それは永遠につづくと思われる濃密な日々であり、桜井との付き合いとは、また別の男同士の心の通い合う〈僕〉にとつては大事な日々であつたのだ。

四章で、〈僕〉の恋愛に関する物語は佳境をむかえる。桜井と〈僕〉との付き合いは、たとえば『ロミオとジュリエット』のような日が一日に一緒にいなければ、夜も日も明けない、ふたりきりだけの世界にひたる恋愛とは少し違うものであつた。おたがいを強く求め合う欲求は当然持つにしても、それを上回るおたがいの知的感受性をカバリー合ひ、それを共有しあう精神的結びつきのほうが強い恋愛だつたといつていい。

〔僕が連れて行かれたのは、日比谷のお濠近くのビルの最上階にある、大企業が経営する美術館だつた〕「よく来るの?」エレベーターに乗つてすぐ、ぼくは訊いた。桜井は、ううん、ときつぱり首を横に振つた。「はじめて。いつも入つてみようと思つただけど、独りじゃなかなか入りにくくて。入るの、イヤ?」僕は首を横に振つた。「僕と桜井の絵の見方はひどく対照的だつた。僕は一枚一枚の絵をきちんと眺めていくのに対して、桜井は瞬間の観た目で絵の好悪を決めるらしく、気に入つた絵の前ではジツと立ち尽くし、そうでないものは風のように通りすぎて行つた。その姿は、見ていてとても分かりやすく、気持良かったので、僕も真似をすることにした。僕はルオーの『老いた王』や、シャガールの『横たわる詩人』の前でだけ立ち止まっ

た。そうやって見ていくうちに、かなり先に行っていた桜井との距離が縮まった。桜井はダリの絵の前で立ち止まり、微笑みを浮かべていた。桜井が観ていたのは、『たそがれの隔世遺伝』という絵で、有名なミレーの『晩鐘』を再構築したものだった。「ダリの最後の一枚の前に立って、桜井は言った。「この人、わたしに喧嘩売ってるのよね。『おまえにこの絵が分かるのか?』って」

「最後の一枚は、人間の体が引き出しになっていて、自在に開け閉めできるのを描いた絵だった。「もう意味なんて全然分かんないんだけど、喧嘩を売られてのは分かるから、ものすごくドキドキする。ほら」桜井はそう言って僕の手を掴んで引き寄せ、自分の胸の真ん中に僕の手のひらを当てた」桜井の知的感受性に〈僕〉がグングン魅かれていく様子が、金城氏独特の視覚的具象性を感じる文体によって、読者はその現場に立ち会って、実際に目で追っているようによく分かる場面ではないか。

この章では、この他に様々な分野で〈僕〉と桜井が、おたがい欠けているものを補い合って共有していく。それは「桜井は僕が薦めたいいのものを、「カッコいい」と言ってくれた。ブルース・スプリングスティール、ル・リード、ジミー・ヘンドリックス、ボブ・ディラン、トム・ウェイツ、ジョン・レノン、エリック・クラプトン、マディ・ウオーターズ、バディ・ガイ……。でもニール・ヤングだけは桜井の趣味に合わなかった。理由を訊いた。「だって、歌が下

手なんだもん」桜井が薦めたいいのものを、僕はカッコいいと思った。マイルス・デイヴィス、ビル・エヴァンス、オスカー・ピーターソン、セシル・テイラー、ディクスター・ゴードン、ミルト・ジャクソン、エラ・フィッツジェラルド、モーツアルト、リヒャルト・シュトラウス、ドビュッシー……。でも、ジョン・コルトレーンだけは僕の趣味に合わなかった。理由を訊かれた。「暗すぎる」などの音楽に関して。また「本は僕の苦手分野だった。僕は小説の類を滅多に読まず、人類学とか考古学とか生物学とか歴史学とか哲学といった、堅くてあまり面白いと言えないような本ばかり読んでいたので、薦めようがなかったのだ。正一に薦められて読んだ小説は、たいいてい日本の古い小説で、そのほとんどを桜井は読破していた。桜井は本好きの父親の影響で、たくさんの本を読んでいた。僕は桜井に薦められて、色々な小説を読んだ。ジョン・アーヴィングやステイヴン・キングやレイ・ブラッドベリは、僕のお気に入りの小説家になった。でも、特に気に入ったのはジェイムズ・M・ケインの『郵便配達はいつも二度ベルを鳴らす』と、レイモンド・チャンドラーの『長いお別れ』だった。そのことを桜井に告げると、桜井は得意気に、『絶対気に入ると思ったよ』と言った」の本類。あるいは、桜井に唐突に切り出されて連れて行かれた世田谷の高級住宅地にあった桜井の家で家族と食事（東大出の桜井のお父さんとは噂み合わない会話になったが）して以来、〈僕〉と桜

井のデート場所となった桜井のAVルームで「ある時は、一日をかけて『ゴッドファーザー』の三部作を観た。『ゴッドファーザー』シリーズは、僕にとって大切な作品だった。例えば『ゴッドファーザーPARTII』の冒頭で、アメリカに上陸したばかりの幼いビト・コルレオーネ（後のゴッドファーザー）が、エリス島から自由の女神を眺めているシーンは、僕がこれまで観てきた映画の中で、一番美しいシーンだった。

『ゴッドファーザー』シリーズは、すべての移民（難民）とその末裔のための作品だった。この世界から移民（難民）がいなくならない限り、『ゴッドファーザー』シリーズは永遠の価値を保ち続ける、というようなことを桜井に力説すると、桜井は微笑みを浮かべながら、言った。「あんまり難しいことはよく分かんないけど、杉原が『ゴッドファーザー』を大好きなことはよく分かったよ」と後の〈僕〉と桜井に不協和音を生む民族問題を暗示する映画の話しなど、多岐に渡る世界共通の文化という形而上の知的会話を通しての、〈僕〉と桜井の深い精神的結びつきの愛情と、当然そこから派生するおたがいが一心同体となる事を渴望する恋情が語られていくのだ。

そして、どうしても〈僕〉のたぎる血を押さえ切れない友人加藤のパーティの会場での喧嘩へと続く事によって、より鮮明に〈僕〉と桜井の恋愛に関する物語を際立たせるのである。

五章で、事態は大きく動く事になる。ひとつは正一の死という出来事、そしてもうひとつの悲しみは、桜井との別れである。それらは、すべて唐突に訪れるのだ。

〔都内の高校に通う、十七歳のある男の子がいた〕この内気な日本人の少年は、いつも通学途中の駅のホームで見る少女にあこがれていた。少女はチマ・チョゴリの制服を着ていた。『彼』は迷った末に、まわりの友人たちに相談を持ちかけた。友人たちは当然のように囁し立て、俺たちがついてやるから思い切って告白しろ、と煽った。『彼』は仲間たちの提案に抵抗できなかった。『彼』は内気で、ひ弱なタイプの子だったのだ。仲間の一人が、これを持つてると気合いが入るぞ、バタフライナイフを『彼』に手渡した。少年は彼女に近寄って、恐る恐る声をかけた。『彼女は反射的に身を震わせた。北朝鮮のテロ行為、日本人拉致問題、核開発疑惑、などのすべてはチマ・チョゴリを着ている彼女の細い肩に背負わされる。彼女は以前、五十がらみのサラリーマンに肩を殴られたことがあった。その駅のホームで』彼女は怯えた、その時、正一が駅のホームに姿を現した。少年がワルさをしていると感じた正一は、後輩の少女を守ろうとした。「彼女の側に駆け寄り、まず『彼』の背中を強く押した。僕はそいつの勘違いを責めることはできない。その場にいたら、僕だって同じことをしただろう。僕とそいつは、そういった勘違いするような状況の中で生きているのだ。いつだって』『彼』はナイフを怖さの

あまり取り出した。ふたりは揉み合った。そして、正一は死んだ。「僕が正一の死の報を受けたのは、事件当日の夜のことで、電話は正一のお母さんからだった。前夜の正一の電話から、まだ二十四時間が経っていないかった」(電話を切ったあと、僕はベッドに仰向けに寝転がり、しばらくのあいだ天井を見続けた。一時間ぐらいは見続けたと思う。そのあいだ何を考えていたのかは、全然思い出せない)〈僕〉
 にとっては衝撃的な出来事だった。

そして「今日、ずーっと一緒にいてあげようか?」「え?」「杉原が寝て起きるまで一緒にいてあげる」「いの?」「訊き返さないでよ、お願いだから」

桜井はそう言って、優しく微笑んだ。正一の死を聞いた桜井は、〈僕〉に身をまかせせる決心をしたのだ。〈僕〉への愛情だった。〈僕〉は桜井と結ばれる前に、〈僕〉の国籍について話す事が桜井への愛情の証しと思った。

〈僕〉たちは、帝国ホテルへ向かった。(長い廊下を歩いて、部屋のドアの前に立った。ドアを開け、中に入った。背後でドアが閉まると、僕と桜井はほとんど同時に、ふう、とため息をついた。「緊張したねえ」と桜井が微笑みながら、言った。僕は素直に頷いた)〈僕〉と桜井は部屋で思い切りはしゃいだ。そしてベッドに横になり愛し合う体制に入った時に、(僕は桜井に気づかれないように深呼吸をして、言った。「ずっと隠してたことがあるんだ」「どうしたの、いきなり」桜井の声にはたつぷりの不安がこもっていた。

「僕自身はたいしたことじゃないと思ってるんだけど……」「なんなの?」「うん……」「俺は、僕は、日本人じゃないんだ」それはきつと十秒とかそこの沈黙だったはずだけれど、僕にはひどく長いものに思えた。「……どうゆうこと?」と桜井は訊いた。「言った通りだよ。僕の国籍は日本じゃない」「……それじゃ、どこなの?」「韓国」桜井は僕のほうに投げ出していた両足を上半身に引き寄せたあと、折り畳み、膝の前で両手を組んで座った。桜井の体がひどく小さく見えた

桜井は怯えていた。お父さんに、子供の頃から韓国とか中国の男とつきあっちゃあダメだと言われて育った桜井にとつて、〈僕〉は血が汚い存在だったのだ。〈僕〉は桜井を失いたくなかった。だから、懸命に生物学的見地からのDNAなどの話しをした「沈黙。僕は身動きもせず、桜井の言葉を待った。桜井は長い長いため息をついて、言った。「本当に色々な事知っているのね。でもね、そうゆうことじゃないの。杉原の言ってること、理屈では分かるんだけど、どうしてもダメなの。なんだか怖いよ……」杉原がわたしの体の中に入ってくることを考えたら、なんだか怖い……」速かった鼓動が徐々に元のスピードに戻り初め、同時に、ついさっきまで僕の体を重くしていた焦燥感が消え始めた。僕は桜井よりも長い長いため息をついた。桜井に背を向け、ベッドを下りた。暗闇の中で白く浮き上がっているタンクトップを拾い、身に着けた)「わたし、初め

てだったのよ……。そうでなくても、怖かったのよ」ズボンをはき終えた。ズボンのポケットに入っていたキーを取り出し、ベッドの脇のサイド・テーブルの上に置いた。「桜井は言った。「わたしの下の名前はね、『椿』っていうの。『椿姫』の『椿』。桜と椿と一緒に入ってる名前なんて、めちゃくちゃ日本人みたいで教えるのがイヤだったの」

ドアノブに手を掛けた。少しだけ迷ったあと、振り返って言った。「僕の本当の名前は『李』。李小龍(ブルース・リー)の『李』。めちゃくちゃ外国人みたいな名前前で、こんな風に君を失うのが怖くて、教えられなかった」ドアを開けて、廊下に出た。ドアを擦り抜ける時に、桜井の声を聞いたように思ったけれど、何を言ったのか聞き取れなかった。「僕は人生で二つの大切なものを一挙に失った。家に戻るとオヤジが寝ずに僕の帰りを待っていた。話さなくともオヤジは僕の気持ちを知っていた。僕は迷った末に明日は学校をさぼることにした(そう決めてすぐに、僕は、泣いた。机の上に頬を載せて、一時間近く泣き続けた。泣いたのは本当に久し振りだった。ベッドに入って、眠りに落ちる前、僕は胸の中で正一に、おやすみ、と語り掛けた。おやすみ」淡々とした描写の中に「僕」という少年の深い喪失と慟哭の込められた文体で、この章を金城氏は閉じるのである。六章では、「僕」がはじめて真正面からオヤジと対決する出来事を中心に物語が綴られていく。オヤジと殴り合い、敗北し、そしてオヤジの気持ちが理解できた話話である。

〔正一の告別式の夜以来、桜井からはなんの連絡もなかった。僕も連絡しなかった〕

また、友人の加藤はしの売買で警察に捕まり、学校を退学していた。加藤は「僕」に当分のあいだ会わないつもりだと電話してきた。加藤は今まで、色々なものに甘えてきて中途半端な男に成りかかっている自分を反省していた。「僕」みたいに自分の足でしっかりと立てるようになってから会おうと笑うと、電話を切った。

学校では、ずっと日本の教育しか受けて来なかった「在日」の宮本という生徒から、「在日」の権利のために勉強したり活動するグループに参加しないかとの誘いを受ける。「僕」は自分だけの足で立つて生きていく事を宮本に告げた。宮本は理解してくれる。

「僕」の日常生活に、そんな微妙な変化の兆しが現れ消えしている時、珍しくひどく酔ったオヤジから、酒代が足りなくなつたので、お金を持って迎えに来てくれとの電話が入った。「オヤジは上野駅の広小路口の改札の脇の壁に、ぐったりともたれて立っていた。壁をずるずると伝わって、いまにも崩れ落ちそうだった。隣には、不機嫌な顔をした若い男が立っていた」「おお、孝行息子よ」オヤジは満面の笑みを広げて、そう言った。ものすごく酒臭い息が、僕の顔にかかった。「お父さんにクレジット・カード持つように言っておいてね」と若い男が嫌味っぽく言った。かなり前の話になるけど、オヤジはクレジット・カードに

入会しようとして、事前の審査で落とされたことがあった。当時、オヤジは腐るほどの金を持っていた。落とされた理由は言うまでもない。オヤジはそれ以来、クレジツト・カードを目の敵にしていた。タクシー乗り場に向かいながらオヤジがポツツリ言った「今日、立て続けに二本の電話があつてな……。一本は、また交換所がなくなる話だった。もう一本は、北朝鮮からの国際電話でな、東吉が死んだ、つて話だった……」僕は足を止めた、東吉とは、北朝鮮に行った僕の叔父さんのことだ」タクシーの中でオヤジは東吉との思い出話をした。終戦直後、オヤジのアボジとオモニが出稼ぎに行き、兄弟ふたりだけで暮らして漁港の手伝いをしながら、わずかの金をもらい生活していた時、東吉の絵が漁船の舳先に飾られた。その三日後、嵐に会ったその漁船が遭難せずに帰ってきたので、縁起のいい絵だと東吉に沢山の注文があり、その金で生まれてはじめてカニを食った話だった。〈僕〉は言った「なにがカニだよ。貧乏くせえこと言つてんじゃあねえよ。もうそういうので泣ける時代は終わつたんだ。あんたたち一世二世が貧乏くせえから、俺たちの世代がいまいち垢抜けられねえんだ」オヤジは目に涙を浮かべたまま、驚いた顔で僕のことを見た。僕は続けた。「北の連中もカニが食いたかつたら、革命を起こしゃいいんだ。なにやつてんだよ、あいつら」オヤジの目から涙が引き始めた」オヤジは酒の気に殺気が入り、顔をまっ赤にして「おまえ、お勉強のし過ぎ

で頭がイカレちまつたららしいな」僕は答えた。「うるせえよ、小卒のパンチドランカー」オヤジはひとつ大きく息を吸つて、運ちゃんに言った。「ちよつと待つててください。外でカタつけてきますから」〈僕〉とオヤジはタクシーを降り、前の公園に入り二mほどの距離で対峙する。オフクロが「あの人に手を出したら、あんたを殺して私も死ぬ」と言つていたが、〈僕〉の気持ちは揺るがなかった。〈僕〉自身の精神の自立のために。〈僕〉はオヤジから習つたボクシングの技術と喧嘩で鍛えた技で、オヤジに立ち向かつた。オヤジは、〈僕〉にボデイにパンチを食らつて倒れるような奴はダメだ。死ぬ程ボデイを鍛えてボデイにパンチを受けて、相手の力を奪い取れ。その代わり頭はしっかり守れ。体がボロボロになつても頭がはつきりしているかぎりチャンスはある。と、くどいほど教えられた戦法で向かう。これで〈僕〉は二五戦無敗の記録を高校で守つてきたのに、オヤジは驚くほど強かつたし、ダーティな戦いを熟知していた。「オヤジは下唇を口の中に巻き込み、歯でしっかりと噛み締めていた。痛みを堪えるためにしている感じではなかつた」(オヤジの意図に気づいた時には、もう遅かつた。オヤジのガードが、一気にパツと開いた。それまで見えていなかった両目がハロゲンランプの光線を反射し、キラリと光つた瞬間、オヤジの口から血が噴き出された。オヤジの目の光に見とれていたせいで、目を閉じるのが遅れた。勝負は常に一瞬で決まる。血が目飛び込み、僕は視

界を失った。僕はオヤジからKOされた。「汚ねえぞ……」オヤジの容赦のない声が体を打った。

「悪いな。俺たちはこうやってどうにかこうにか勝ちを拾ってきたんだ。いまさらやり方を変えるわけにはいかねえんだよ」「オヤジは、カッカッカッ、と楽しそうな笑い声を上げた。このクソオヤジは小学校しか出てなくせに、独学でマルクスやニーチェを読めるようになった。鉄筋コンクリートのような体と、氷のように冴えた頭脳で闘い続け、このタフな国で生き抜いてきた。僕はこのクソオヤジが、どうして急に韓国籍に変えたのか分かっていない。ハワイのためじゃない。僕のためだ。僕の足にはまっついている足枷を、ひとつでも外そうと思っただけだ」「孤立無援で闘い続けている、このクソオヤジにねぎらいの言葉をかけてやる人間は、この国にはほとんど存在しない。だから、僕が言ってることにした。「いつか、俺が国境線を消してやるよ」僕はとオヤジの心は繋がった。そして、僕はミトコンドリアDNAという一本線で辿っていった末の自分のルーツのたった一人の女の人に辿り着く、ひとりの個としての人間となった瞬間だった。

最終章の七章で、僕はと桜井との恋愛は結ばれる。

クリスマス・イブの「夜、電話が鳴った。おーい！という声が下から聞こえてきた。オヤジとオフク口はチェスをしている時、絶対に電話には出ない。仕方なく勉強の手を休め、子機を手を取った。桜井からだだった。「久し振りね」

と桜井は言った。僕は返事をためらった。「元気？」僕は黙っていた。短い沈黙のあと、思い切ったような桜井の声が届いた。「あの小学校、おぼえているでしょう？ いまからあそこへ来て。来てくれるまでずーっと待ってるから」一二月、受験勉強に真面目に取り組み、正一の告別式以来の元秀と池袋駅のホームで偶然会い、ぎこちない和解をし、ナオミさんがアメリカ人と結婚する事になったのを知った。しかし、心の空白は埋まっていなかった。

僕は、桜井と会いに小学校の校庭に行った。

僕は桜井の前にしゃがみ込んだ。僕の急な動きに、桜井の口から言葉の代わりに、浅い息が漏れた。顔がひどく緊張している。僕は桜井の顔を睨みつけるように見上げながら、言った。「俺は何者だ？」「え？」「俺は何者だ？」桜井は少し迷った末に、答えた。「……在日韓国人」僕は立ち上がり、胸像の台座の部分を思い切り三回蹴ったあと、桜井に向き直って、言った。「俺はおまえら日本人のことを、時々どいつもこいつもぶっ殺してやりたくなるよ。おまえら、どうしてなんの疑問もなく俺のことを「在日」だなんて呼びやがるんだ？俺はこの国で生まれてこの国で育っているんだぞ。在日米軍とか在日イラン人みたいに外から来てる連中と同じ呼び方するんじゃないやあねえよ。在日」って呼ぶってことは、おまえら、俺がいつかこの国から出てくよそ者って言ってるようなものなんだぞ。分かってんのかよ。そんなこと一度でも考えたことあんのかよ」桜井は息

を呑んで、僕のことをジッと見つめていた。僕は桜井の目の前にひざまずき、そして、言った。「別にいいよ、おまえらが俺のことを〈在日〉って呼びたきゃあそう呼べよ。おまえら、俺が怖いんだろ？ 何かに分類して、名前をつけなきゃあ安心できないんだろ？ でも俺はみとめねえぞ。俺はな、〈ライオン〉みたいなものなんだよ。〈ライオン〉は自分のことを〈ライオン〉だなんて思ってたねえんだ。おまえらが勝手に名前をつけて、〈ライオン〉のことを知った気になつてただけなんだ。それで調子に乗って、名前を呼びながら近づいてきてみるよ、おまえらの頸動脈に飛びついて、噛み殺してやるからな。分かってんのかよ、おまえら、俺を〈在日〉って呼び続けるかぎり、いつまでも噛み殺される側なんだぞ。悔しくねえのかよ、言つとくけどな、俺は〈在日〉でも、韓国人でも、朝鮮人でも、モンゴロイドでもねえんだ。俺を狭いところへ押し込めるのはやめてくれ。俺は俺なんだよ。いや、俺は俺であることも嫌なんだよ。俺は俺であることから解放されたいんだ。俺は俺であることを忘れさせてくれるものを探して、どこにでも行つてやるぞ。この国にそれがなけりゃ、おまえらの望み通りこの国から出てつてやるよ。おまえらにそんなことできねえだろ？ おまえらは国家とか土地とか肩書きとか因襲とか伝統とか文化とかに縛られたまま、死んでいくんだ。ざまあみろ。俺はそんなもの初めから持つてねえから、どこにだつて行けるぞ。いつだつて行けるぞ。悔しいだろ？ 悔しくね

えのかよ……。ちくしゅう、俺はなんでこんなこと言つてるんだ？ ちくしゅう、ちくしゅう……」桜井の両手が僕の頬に伸びてきて、びつたりと触れた。桜井の手はとて暖かかった。「その目……」と桜井はかすかに微笑み、震える声で言った。「：目？」と僕は問い返した。桜井は頷いたあと、笑みを深めて、続けた」と桜井がなぜ僕を知ったのかを告白する。彼女は去年の九月、僕のバスケットの試合を見たのだ。その試合でひどいファウルを受け、それが原因で大乱闘に発展し、相手チームの大半をのしてしまつた僕は「杉原を取り押さえろ」のコーチの命令でチームメイトから場外に連れ出された時に、身を乗り出して見ていた桜井を僕がライオンのような猛々しい目で睨みつけたらしいのだ。その瞬間、桜井は僕を好きになり、あのパーティに押しかけて僕を探し出したのだった。「ふいに顔を胸の中に引き寄せられた。後頭部とうなじに桜井の手がかかり、ギョツと抱き締められた。桜井の、ドクンドクン、という心臓の音が聞こえてきた。ドクドクン、ドクンドクン、……。なんて懐かしい音なんだろう。桜井の音が頭に降ってきた。「もう杉原が何人だつてかまわないよ。時々、飛んでくれて、睨みつけてくれたら、日本語が喋れなくなつてかまわないよ。だつて、杉原みたいに飛んだり、睨みつけたりできる人、どこにもいないもん」「ほんと？」と僕は桜井の胸に顔をつけたまま、訊いた。「ほんとだよ。わたし、ようやく、そのことに気づいた。もしかしたら、杉原を見た初めから

気づいていたのかもしれないけど」桜井はそう言っつて、僕の頭のでっぺんにキスを三回してくれた。桜井の手が緩んだので、僕はゆっくりと顔を胸から離れた。桜井が僕の顔を見つめて、訊いた。「どうして泣いてるの?」「嘘つげよ」と僕は言った。「僕は人前では泣けない男なんだ。桜井は眩しいものでも見るように目を細めて微笑んだあと、また僕の頬に両手をあて、親指を優しく動かし、涙を拭き取ってくれた」そして「桜井は僕の横を擦り抜け、スキップのような足取りで正門のほうに向かった。僕はひざまずいたまま、桜井の後ろ姿を目で追った。桜井が足を止め、振り返った。僕がこれまで見たことのないような微笑みが、浮かんだ。そして、雪のように白い息とともに暖かい声がかき出され、僕の耳に届いた。「行きましよう」こうして僕の恋愛に関する物語は小学校の校庭からはじまり、小学校の校庭で成就したのである。

では、この〈僕〉の視点で語られるいわば一人称的な物語構成を組む金城一紀氏の長編小説を、視覚的具体性を要求される映画化に際して脚本を担当した宮藤宮九郎氏は、どのような構成を組んだのかを見てみよう。まず宮藤氏の脚本上のシーン・ナンバーを表にして、それに金城氏の長編小説の七章を当てはめてみる事にする。

		(シーンタイトル)	小説・章
1	体育馆		7
2	地下鉄の駅・ホーム(3年前)		4
3	タイトル「GO」		
4	道		6
5	警察署		6
6	同・廊下		
7	杉原家・外観(以上・タイトルバック)		
8	同・リビング		1
9	代書屋		
10	大使館・カウンター		1
11	杉原家・玄関		1
12	車内(夕)		
13	砂浜		1
14	河原(杉原の日常描写)		
15	校庭		
16	イメージ映像		
17	イメージ映像		
18	イメージ映像		
19	補導され、強制的に指紋を取られている杉原		
20	道		2
21	道(イメージ)		
22	校庭		2
23	道		
24	パチンコ店・交換所		
25	体育馆		7
26	教室		2

52	喫茶店	3	〔シーンタイトル〕 小説・章
51	同・廊下	3	
50	同・教室		
49	民族学校・廊下		
48	寄宿(日替わり・日曜)		
47	玄関(数週間後)		
46	公園(回想戻り)	3	
45	民族学校・教室		
44	空き地(回想8年前)	3	
43	道	3	
42	杉原家・前		
41	同・外	2	
40	小学校・校庭	2	
39	道	2	
38	同・フロア	2	
37	クラブ・店内	2	
36	道	2	
35	焼肉店		
34	民族学校・教室(回想)		
33	同・トイレ		
32	高級焼肉店		
31	交換所		
30	屋上(回想戻り)		
29	組事務所		
28	教室(回想)	2	
27	屋上		

78	杉原家・廊下	5	〔シーンタイトル〕 小説・章
77	同・外	5	
76	病院	5	
75	駅のホーム	5	
74	杉原家	4	
73	橋の上	3	
72	居酒屋(回想)	3	
71	道	4	
70	焼肉店	4	
69	同・AVルーム	4	
68	同・リビング	4	
67	桜井家・前	4	
66	繁華街	4	
65	杉原家・廊下		
64	焼肉店		
63	民族学校・教室		
62	組事務所		
61	寄宿		
60	動物園		
59	国会議事堂の前		
58	杉原の学校・売店		
57	桜井の学校・体育館		
56	桜井の学校・売店		
55	桜井の学校・体育館	4	
54	道		
53	焼肉店・個室	3	

104	同・校庭	7	小説・章
103	小学校・門の前	7	
102	杉原家・廊下	7	
101	杉原の部屋		
100	ホテル		
99	道		
98	交換所		
97	駅のホーム（日替わり）	7	
96	杉原家・前	6	
95	公園	6	
94	タクシートの車内	6	
93	杉原家・玄関	6	
92	道	6	
91	杉原家・廊下	6	
90	寄席（日替わり）		
89	駐車場	5	
88	別な道	5	
87	駐車場	5	
86	道	5	
85	地下鉄構内へ改札		
84	高級ホテル デラックスルーム	5	
83	駅のホーム	5	
82	ファミレス	5	
81	駅のホーム		
80	告別式・会場	5	
79	ホール・前（以下随時カットバック）	5	
	（シーンタイトル）		小説・章

105	体育館（フリーストシーン）	7	小説・章
106	小学校・校庭	7	
	（シーンタイトル）		小説・章

（空白は宮藤脚本によるオリジナルとアレンジシーンである）

このように宮藤氏は、全体を一〇六シーンで構成している。

大きく見ると、シーン七〜三までが一章、シーン二〇〜四一までが二章、シーン四二〜五三までが三章、シーン五五〜七四までが四章、シーン七五〜八九までが五章、シーン九一〜九六までが六章、シーン九七〜一〇六までが七章、という構成であり、おおむね金城氏の小説の流れを順守して作劇しているのが分かる。

しかし「脚色というのは、凄く冷静さを求められる作業だと思いました。僕はそうゆうことが苦手なので、どうしたものかと最初は悩みました」「避けて通れないテーマとして在日韓国人のことがあるんですけど、それは僕がどんなに調べて考えても当事者である原作者にはかなわない。そこで勝負しない方がいいなと思って、最初に天野さんに会った時、『これが差別問題を真正面から扱うような映画だったら、僕にはちよつと違うかも知れない』と言ったんです。そしたら『いや、そんなつもりはありません』と。青春というか友情をメインにやりたいとおっしゃったので、できるかなと感じたんです。」と述べているように、作

中のシーン構成としてメインとなる〈僕〉杉原と桜井との出会いからクライマックスとなる一時的決別そして再会和解のシーンを、小説の二章に当たるシーン三八から桜井を登場させ、ふたりの恋―決別―和解までをラストのシーン一〇六までを含めて二五シーンを割いている。

また〈僕〉の友人である正一・元秀・タワケ先輩との関係はシーン二から登場させ二一シーンを割くが、特に〈僕〉の心の成長に重要な役割を持つ正一との関係は五シーンのみだが長い台詞のある友人の核として存在として扱う姿勢が感じられる。

この二つの青春・愛・友情を全面に押し出すテーマのシーンは合計四六シーンと脚本の半分ちかくを割いているところに、宮藤氏の「できるかなと感じたんです」と述べた気持ちがよく出ている脚本構成となっているのである。

同時に、宮藤氏が作劇においてもうひとつの中心としたのが〈僕〉の家族と向き合う姿勢である。

それはオヤジである秀吉から見た〈僕〉への愛情であり、〈僕〉から見たオヤジへの愛情表現でもある。

その事はシーン五からはじまりシーン一〇二まで二七シーンをとって脚本の最初から最後まで満遍なく登場させる事によって、その関係を強く印象づける作劇手法によって、よく分かるように意図的にしむけている。

この〈僕〉を取り巻く三つの挿話を縦糸として構成しているのは、これらを合わせると七四シーンとなり全体構成

の七〇%以上になる事からも、その意図がよく分かる。また、小説の三章では、〈僕〉の民族学校時代の挿話をかなりの頁を割いて書いているが、それらの挿話は友人たちのシーンに挿入され、民族学校の教育体制については脚本では七シーンにとどまり、それも宮藤氏独特のシニールな方法でカリカチュアされたシーンとなっている。

それは「最初に天野さんに会った時、『これが差別問題を真正面から扱うような映画だったら、僕にはちよつと違うかも知れない』と言ったんです」と言う宮藤氏の脚本意図から言えば当然の方法論と考えられるが、しかし小説の三章に記述されるタワケ先輩の指紋押捺の挿話などは、しっかりと脚本には挿入される。それはシーン七二「居酒屋(回想)」（杉原とタワケ、カウンターに並んでいる。タワケ「クルパー、オレな」杉原「はい」タワケ「指紋押して来たよ」杉原「・・・」杉原M「当時はまだ、在日外国人に対する指紋押捺制度が残ってた」タワケ「せめて役所の人間、一発ずつ殴ってやろうと思ってたんだけどさ(ビールを飲む)」杉原「・・・(ビールを注ぐ)」タワケ「出て来たのが足引きずったオッサンで、そいつがまだガキの俺にホントすまなそうに『ご苦労様です』なんて言うわけ、全部で一五回くらい『ご苦労様です』って」杉原「・・・」インサート。登録課の女性職員の手元。タワケN「指紋押す紙持ってた姉ちゃんの顔には痣があつてさ。一度も目え合わせなかったけど、俺が押す時にこう、ノートつい立て

にして隠してくれるんだよ」シーン七三 橋の上「潰れたボールを蹴っているタワケと杉原。タワケ「俺はもう殴るどころじゃあなかつたよ。『すいませんすいません』って、あんなに頭下げたの、生まれて初めてだよ」杉原「……」タワケ「あくあ、とうとう捕まっちゃまった。権力つて恐ろしいな。よっぽど速く走らねえと逃げ切れねえ」杉原「……」とか、小説の五章にある正一が駅のホームで同じ民族学校に通う女子生徒に日本人の内気な高校生がラブレターを渡そうとしているのを嫌がらせを受けていると誤解し、彼女を守ろうとして逆上した高校生からナイフで刺し殺される挿話（シーン七五 駅のホーム）であり、宮藤氏は全体構成の中で、自分流の方法で差別問題にアプローチする事を試みているのである。

また、その意識は小説でもクライマックスとなる五章に合わせ、前述したシーン七五の正一の死から、桜井との別り込まれた差別意識による悲しい別れまで（シーン八四 高級ホテル・デラックスルーム）までの九シーンを作劇上のクライマックスに設定して〈僕〉の身の回りで起きた在日という出自からくる変転を描写しようとしている。

特に、シーン八四の桜井と高級ホテルで身体を合わそうとする場面の描写は、小説五章とほとんど設定や会話を變更せずに、〈僕〉が在日韓国人である事を打ち明け、桜井からその事で拒否される（その内容は小説五章の部で詳述しているので省略する）場面は、宮藤氏の脚本でも最も大

事なシーンとしており、民族学校のシーンが小説に比較して非常に少ない方法論をとっていても、小説の持つテーマはしっかりと押さえた独自の視点からの脚本となつている。

それは宮藤氏が語る「第一稿の時には、国籍という主人公のルーツの話し。それをバサバサ切つていったんです。その後で監督やプロデューサーからでた、原作のこの部分を活かしたいという意見を足していきました。これが在日韓国人の話だということは、公開前の情報でわかると思っています。だからそれは、表立って見せないようにしよう。それでも出来た映画を観たら、その問題がでかいじゃありませんか。今思うと、あのぐらいでちょうど良かったと思えますよ」という言葉から、自分の作劇方法に少なからず自信を持っていた事が推察される。

このように本筋においては、金城氏の長編小説をきちんとダイジェストしているのだが、それは「監督や原作者に、これは王道を行く映画にしたいというムードがあった」からであり、そのため原作の持つ香りは十分に残す方法をとりながら「原作だとオペラとか、もうチョイ高尚なアイテムが出てくる」のには抵抗を示している。例えばそれはシーン六一寄席で〈僕〉が桜井をドツキ漫才を聞きに連れていき、桜井から「めちゃくちゃ面白い」と喜ばれるシーンであり、桜井と別れた後にシーン六一での桜井のはしゃぎぶりとその姿を見る僕よろこびの時間を伏線としたシーン

九〇 寄席(めくり)、『黄金餅』高座で若い落語家が一生懸命喋っている。客は杉原ひとりである。杉原、『シェイクスピア全集』を読んでいる。折っている場所に気がついて聞く杉原。嘶家「兄ちゃん、はしょっていいかな」杉原「:(顔上げない)」嘶家「言いにくだよねコレ、いいよね? はしょって」杉原「・・・」嘶家「はしよるよ」本の上に涙が落ちる。そこにはこう書かれている。(線が引かれている?) 『名前つてなに? バラと呼んでいる花を別の名前にしても 美しい香りはそのまま』では宮藤氏のセンズで原作にない漫才・落語を脚本で創作しながらも、金城氏が小説テーマの象徴として巻頭に置いた『ロミオとジュリエット』の台詞をさりげなく入れ、大衆芸能とシェイクスピアという異なるアイテムをミックスさせて〈僕〉の現在の心境を表現するという方法を取り入れている。

このような例は、小説二章での民族学校時代の思い出としてシーン三四での宮藤氏のオリジナルなアイデアによる、学校内での日本語使用禁止の規則を破った元秀と教師の会話のユーモア感覚抜群のシーンでも、そのアレンジの才能が光っている。

そう言った意味では、金城一紀氏の原作とは細部においては宮藤官九郎氏のアプローチ方法は異なるが、核心の部分では共通するテーマを追及するという姿勢を見事に示した脚本として『GO』は二一世紀の劈頭の作品として高く評価されてしかるべきである。

(注)

①この『千と千尋の神隠し』は、二〇〇一年度の〈日本アカデミー賞〉の最優秀作品賞にも選出されており、

二〇〇二年度のアメリカの〈アカデミー賞〉では長編アニメーション映画賞を受賞している。

②『キネマ旬報』二〇〇二年二月下旬号 P 一三四～一三六

③この製作総本数の中から〈成人映画〉の数は除外している。

④この内一九四六～一九八九年の表は〈戦後日本映画にみる「原作」について—その質と量の問題〉衛藤賢史／一九九〇『別府大学紀要』三一号の表を利用した。

⑤金城一紀(かねしろ・かずき)一九六八生 作家

一九九八年『レヴォリューションNO三』で〈小説現代新人賞〉

二〇〇〇年『GO』で〈直木賞〉

⑥宮藤官九郎(くどう・かんくろう)一九七〇生 作家・

演出家・俳優・脚本家

二〇〇〇年 TBS『池袋ウエストゲートパーク』で脚本家としてデビュー

二〇〇一年『GO』の脚本 〈キネマ旬報・日本映画脚本賞〉〈第五三回・読売文学賞〉

⑦行定勲(ゆきさだ・いさお)一九六八生 映画監督
一九九七年『OPEN HOUSE』で映画監督としてデ

ビュー

二〇〇一年 『GO』で日本アカデミー賞・最優秀監督賞〈キネマ旬報・日本映画監督賞〉

⑧小説『GO』金城一紀 二〇〇〇年 講談社より初版出版
この論文作成においては『GO』角川書店文庫本 平成一九年初版を利用した。

⑨『二〇〇一年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編
二〇〇二年初版発表 映人社

⑩『キネマ旬報』二〇〇二年 二月下旬号 P一二四

⑪『キネマ旬報』二〇〇二年 二月下旬号 P一二四